

六朝の行旅詩―旅夜の変遷―

佐伯雅宣

はじめに

筆者は現在、六朝の行旅詩について、その變遷と唐詩への繼承を明らかにしようと研究を進めている。前稿では、その行旅詩の中でも、「旅立ち」という状況に限定してその特徴を考察したが、本稿では「旅夜」という観点から、六朝の行旅詩について検討を加えたい。

なおテキストは『文選』および『古詩紀』を用い、遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』を適宜参照した。

六朝の行旅詩を見ていく上で大いに參考となるのは『文選』行旅の部であるが、それは晉の潘岳の詩から始まる。すなわち「河陽縣作」「在懷縣作」など、官吏として地方に赴き、その任地において作られた詩である。つまり當時の意識としては、故郷や都など、本來あるべき地から遠く離れた場所にあることが旅であり、地方官としてその任地に數年留まっていたとしても、旅の途上にあると認識していたようである。またその一方で晉の陸機には「赴洛道中作二首」という詩がある。これは文字通り、洛陽へと向かう道中の作である。これらとともに『文選』

行旅の部に收められているが、行旅詩としては分けて考えたい。本稿では、後者のいわゆる「道中の作」を中心に、旅の途上の夜が描かれたものを「旅夜」の詩として考察していく。なお「道中の作」とは旅の道中で詠われたもの、および旅の道中の様子が詠われたものを指すものとする。

このような詩は晉代以降、増加していくのだが、まずその前段階として魏以前の詩について見てみたい。

一 魏以前

旅は詩の主要なテーマであり、すでに古くは『詩經』から旅を詠った詩は當然多く見られる。この『詩經』に見られる旅の多くは、戦や行役に従うためのものであり、旅の苦難や別離の悲しみが詠われている。その中で夜がどのように描かれているのかを見てみたい。

『詩經』豳風・東山

蜎蜎者蠋

蜎蜎たる者は蠋

烝在桑野

烝しく桑野に在り

敦彼獨宿 敦^{たふ}たる彼の獨宿
亦在車下 亦た車下に在り

例えばこの『詩經』幽風・東山は出征した兵士の歌であり、行軍の苦難や故郷への思いなどが詠われているが、その中で「敦たる彼の獨宿、亦た車下に在り」と、車の下で獨り寝の夜を過ごしている様子が描かれている。

『詩經』小雅・小明

念彼共人 彼の共人を念ひ
興言出宿 興^{おこ}きて言に出でて宿す
豈不懷歸 豈に歸るを懷はざらんや
畏此反覆 此の反覆を畏る

また、この『詩經』小雅・小明では、旅に出たものが、憂いのために夜眠れないことを詠っている。

しかし『詩經』の行旅詩の中で、具體的に夜の場面が描かれるものは上記二例ほど他には見られない。また数少ない例においても「旅夜」が主題となるのではなく、あくまで旅の様子が詠われるなか、道中の一場面として夜の描寫がなされている。むしろ旅と夜が關わるのは、故郷に残る女性が、夜に旅先にいる男性を思うような場合である。

『詩經』王風・君子于役

君子于役	君子 役に ^{やく} 于く
不知其期	其の期を知らず
曷其至哉	曷 ^{いか} か其れ至らん哉 ^や
雞棲于埘	雞 埘 ^{なぐさ} に棲む
日之夕矣	日の夕
羊牛下來	羊牛 下り來る
君子于役	君子 役に ^{やく} 于く
如之何勿思	之を如何 ^{いかん} ぞ 思ふ勿 ^な からんや

この『詩經』王風・君子于役は、妻が旅に出た夫を思つて作つたものと思われる。行旅詩とは少し異なるが、「曷か其れ至らん哉、雞埘に棲む。日の夕、羊牛下り來る」という部分に注目したい。すなわち夕暮れ（夜）とは鳥や獸がねぐらへと歸り休む時間帶であり、そのような時になつても休むことのできない相手のことを思い、憂えているのである。

鳥や獸、萬物が落ち着くべき場所であつてと憩うべき時に、異郷にあつて落ち着くことができないのが、まさに「旅夜」という状況ではないだろうか。なお、「夕」と「夜」とは嚴密には時間帶としては異なり、本來分けて考えるべきであろうが、今回はまとめて「旅夜」として考察している。

續いて漢代の古詩である。

「古詩十九首」其十九

明月何皎皎

照我羅牀緯

憂愁不能寐

攬衣起徘徊

客行雖云樂

不如早旋歸

出戶獨徬徨

愁思當告誰

引領還入房

淚下沾裳衣

明月 何ぞ皎皎たる

我が羅牀緯を照らす

憂愁して 寐める能はず

衣を攬りて 起ちて徘徊す

客行 樂しと云ふと雖も

早に旋歸するに如かず

戸を出でて 獨り徬徨し

愁思 當に誰にか告ぐべき

領を引きて 還りて房に入り

涙下りて 裳衣を沾す

この詩は旅に出たものが故郷を思う内容であり、愁いのために夜眠れないことが詠われている。「旅夜」を主題とした詩の最も早い例と言える。また李陵、蘇武の作とされる一連の古詩にも、同様に旅の夜が描かれるものがあるが、やはり基本的には「旅夜」とは、本來憩うべき時間帶に故郷を遠く離れているということを實感させ、愁いをより深くさせるものなのである。

ただしこれら漢代の古詩は、その具體的な背景が不明なものも多く、故郷を遠く離れた地に長く留まつてのもののなか、いわゆる「道中の作」であるのかは判別できない。

これが三國・魏の時代になると、作者と作詩背景とがある程度分かるものも増えてくる。しかし、やはり「道中の作」と判別できるものはまだあまりない。

一方で故郷を遠く離れた地で迎える夜は、古詩と同じく憂いを抱かせるものとして詠われている。

王粲「七哀詩」其二

荆蠻非我鄉

何爲久滯淫

方舟溯大江

日暮愁我心

山崗有餘暎

巖阿增重陰

狐狸馳赴穴

飛鳥翔故林

流波激清響

猿猴臨岸吟

迅風拂裳袂

白露沾衣衿

獨夜不能寐

攝衣起撫琴

絲桐感人情

爲我發悲音

羈旅無終極

憂思壯難任

荆蠻は我が郷に非ず

何爲れぞ久しく滯淫せん

舟を方べて大江を溯り

日暮れて我が心を愁へしむ

山崗に餘暎有り

巖阿に重陰を増す

狐狸 馳せて穴に赴き

飛鳥 故林に翔る

流波 清響を激しくし

猿猴 岸に臨みて吟ず

迅風 裳袂を拂ひ

白露 衣衿を沾す

獨夜 寐める能はず

衣を攝りて 起ちて琴を撫す

絲桐 人の情に感じ

我が爲に悲音を發す

羈旅 終極無し

憂思 壯んにして任へ難し

この王粲の「七哀詩」は、都を遠く離れた荊州での様子を詠ったものであり、「道中の作」ではないが、広い意味

では行旅詩である。この中でも「日暮れて我が心を愁へしむ」といい、夕暮れ時の愁いが詠われ、ねぐらへと歸る鳥や獸の様子が描寫されている。それが故郷を遠く離れた王粲の愁いを深くしているのであろう、結果、「獨夜寐ぬる能はず、衣を攝りて起ちて琴を撫す」とあるように、眠れぬ夜へと繋がっていく。

魏文帝「雜詩二首」其一

漫漫秋夜長

烈烈北風涼

展轉不能寐

披衣起彷徨

彷徨忽已久

白露沾我裳

俯視清水波

仰看明月光

天漢回西流

三五正縱橫

草蟲鳴何悲

孤鴈獨南翔

鬱鬱多悲思

綿綿思故鄉

願飛安得翼

欲濟河無梁

向風長歎息

漫漫として秋夜長く

烈烈として北風涼し

展轉として寐ぬる能はず

衣を披^きて 起ちて彷徨す

彷徨 忽ち已に久しく

白露 我が裳を沾す

俯して清水の波を視

仰ぎて明月の光を見る

天漢 回^りて西に流れ

三五 正に縱横たり

草蟲 鳴くこと何ぞ悲しき

孤鴈 獨り南に翔る

鬱鬱として 悲思多く

綿綿として 故郷を思ふ

飛^ばんことを願ふも安んず翼を得ん

濟^{わた}らんと欲するも河に梁^{はし}無し

風に向ひて長く歎息し

斷絶我中腸 我が中腸を斷絶す

この魏文帝「雜詩二首」其一について、李善は「集云 枹中作」（集に云ふ枹中の作なりと）という。もしそうであれば、「枹中」とは「枹罕」（甘肅省和政縣付近）であり、やはり故郷を遠く離れた地で、愁いで眠れぬ夜を過ごす様子を詠ったものと言える。

以上、魏以前の行旅詩における夜の描寫を見てきた。まず『詩經』には旅の道中の様子を詠ったものはいくつか見られるが、漢代の古詩や魏詩においては、こういった「道中の作」はほとんど見られない。というよりも「道中の作」であるか否かは區別できないものが多い。しかし故郷を遠く離れた地において迎えた夜の様子はしばしば描かれている。そしてこのような「旅夜」は、萬物が眠りにつく時間帯に故郷を遠く離れていることをより強く感じさせるものである。その結果、憂いのため眠れぬ夜という形で詠われるのである。

二 晉・宋代

さて晉・宋代の詩についてであるが、この時期から行旅詩の数は増えてくる。それは詩人たちが官吏として地方へ赴任することが増え、そのような状況で詩を作るこゝとが多くなつたためであろう。そしてこの時代からいわゆる「道中の作」というものが徐々に作られるようになる。詩題、あるいは内容から旅の「道中の作」と思われ

るものを以下に挙げておく。

陸機「於承明作與弟士龍」「赴洛道中作二首」

湛方生「帆入南湖」「還都帆」

陶淵明「始作鎮軍參軍經曲阿作」「辛丑歲七月赴假還江

陵夜行塗口」「庚子歲五月中從都還阻風於規林二首」

「乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪」

謝靈運「過始寧墅」「富春渚」「七里瀨」「初往新安桐

廬口」「道路憶山中」「入彭蠡湖口」

謝惠連「西陵遇風獻康樂」

顏延之「北使洛」「還至梁城作」「始安郡還都與張湘州

登巴陵城樓作」

鮑照「上潯陽還都道中作」「還都道中三首」「岐陽守風」

「還都至三山望石頭城」「行京口至竹里」

この中で旅夜が描かれている詩を見ていくと、まず陸機の「赴洛道中作」がある。先にも述べたとおり、これは洛陽へと向かう道中の作であるが、詩題に「道中作」と付けられるのはこの陸機から始まる。

陸機「赴洛道中作二首」其一

洛に赴く道中の作二首 其一

總轡登長路

轡を總べて長路を登り

嗚咽辭密親

嗚咽して密親を辭す

借問子何之

借問す 子 何ぞ之く

其二

世網嬰我身
永歎遵北渚
遺思結南津
行行遂已遠
野途曠無人
山澤紛紆餘
林薄杳阡眠
虎嘯深谷底
雞鳴高樹巔
哀風中夜流
孤獸更我前
悲情觸物感
沈思鬱纏綿
佇立望故鄉
顧影悽自憐

遠遊越山川
山川脩且廣
振策陟崇丘
案轡遵平莽
夕息抱影寐
朝徂銜思往
頓轡倚嵩巖
側聽悲風響

世網 我が身に嬰る
永歎して 北渚に遵ひ
思を遺して南津に結ぶ
行き行きて遂に已に遠く
野途 曠として人無し
山澤 紛として紆餘たり
林薄 杳として阡眠たり
虎は深谷の底に嘯き
雞は高樹の巔に鳴く
哀風 中夜に流れ
孤獸 我が前を更たり
悲情 物に觸れて感じ
沈思 鬱として纏綿たり
佇立して故郷を望み
影を顧みて悽として自ら憐れむ

遠遊して山川を越え
山川 脩く且つ廣し
策を振ひて崇丘に陟り
轡を案じて平莽に遵ふ
夕に息ひて影を抱きて寐ね
朝に徂きて思を銜みて往く
轡を頓めて嵩巖に倚り
聽を側て風響を悲しむ

清露墜素輝

清露 素輝を墜とし

明月一何朗

明月 一に何ぞ朗らかなる

撫几不能寐

几を撫して寐ぬる能はず

振衣獨長想

衣を振ひて獨り長く想ふ

其一では、虎や鶏の鳴き聲、あるいは眼の前を通り過ぎる獸の姿が、旅の愁い、故郷への思いをかき立てている。其二では美しい月を眺めつつ、「几を撫して寐ぬる能はず、衣を振ひて獨り長く想ふ」と眠れぬ夜の様子が詠われる。やはり旅の道中で迎える夜も、故郷への思い、旅の愁いをかき立てるものであることは變わりない。

陶淵明「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口」

辛丑の歲七月 假に赴き江陵に還らんとし
て夜 塗口を行く

閑居三十載

閑居すること三十載

遂與塵事冥

遂に塵事に冥し

詩書敦宿好

詩書 宿好を敦くし

林園無世情

林園 世情無し

如何舍此去

如何ぞ 此を捨てて去り

遙遙至西荆

遙遙として西荆に至る

叩棹新秋月

棹を叩く 新秋の月

臨流別友生

流れに臨みて友生に別る

涼風起將夕

涼風 將に夕ならんとするに起こり

夜景湛虛明

夜景 虛明を湛ふ

昭昭天宇闊

昭昭として天宇闊く

皐皐川上平

皐皐として川上平らかなり

懷役不遑寐

役を懷ひて寐ぬるに遑あらず

中宵尚孤征

中宵 尚ほ孤り征く

商歌非吾事

商歌は吾が事に非ず

依依在耦耕

依依たるは耦耕に在り

投冠旋舊墟

冠を投じて舊墟に旋り

不爲好爵榮

好爵の爲に榮はれざらん

養眞衡茅下

眞を衡茅の下に養ひ

庶以善自名

庶はくは善を以て自ら名づけん

續いて陶淵明の「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口」を見た。この詩は休暇を終えて任地である江陵へ向かう途中、塗口（武漢市付近）を過ぎた時の作であるとする説と、休暇を得て故郷へ歸る途中であるとする説があるようであるが、ひとまず前者に従っておく。この中で陶淵明は旅の途上で見た夜の風景を、「涼風 將に夕ならんとするに起こり、夜景 虛明を湛ふ。昭昭として天宇闊く、皐皐として川上平らかなり」と詠う。その情景は非常に美しく描寫され、必ずしも旅の愁いにつながっていくわけではない。また夜に眠れない理由も、「役を懷ひて寐ぬるに遑あらず」とあり、職務のためであるという。この詩における旅夜の描かれ方は、これまでのものとは様子が少々異なっている。

謝靈運「七里瀨」

羈心積秋晨
晨積展遊眺
孤客傷逝湍
徒旅苦奔峭
石淺水潺湲
日落山照曜
荒林紛沃若
哀禽相叫嘯
遭物悼遷斥
存期得要妙
既秉上皇心
豈屑末代諂
目覩嚴子瀨
想屬任公釣
誰謂古今殊
異世可同調

羈心 秋晨に積る
晨に積れば遊眺に展さんとす
孤客 逝湍に傷み
徒旅 奔峭に苦しむ
石淺くして水は潺湲たり
日落ちて山は照曜す
荒林 紛として沃若たり
哀禽 相ひ叫嘯す
物に遭ひて遷斥を悼み
期を存して要妙を得たり
既に上皇の心を秉り
豈に末代の諂を屑みんや
目に嚴子の瀨を覩
想は任公の釣に屬す
誰か謂はん 古今殊なりと
世を異にするも調を同じくす可し

續いて謝靈運の詩を見てみたい。まず「七里瀨」(謝靈運が永嘉郡へ左遷される道中、浙江省洞廬縣の七里瀨を通ったときの作と思われる)であるが、この詩ではまず「羈心」(旅の愁い)を「遊眺」(山水に出かけ風景を眺めること)によって晴らそうとしている。しかし旅の途上で見た風景、そこには「日落ちて山は照曜す」とあるように夕暮れの景色も含むが、「物に遭ひて遷斥を悼み」

と詠うように、時の推移を嘆かせるものであった。旅の愁いとは少々異なるが、夕暮れの風景から愁いに繋がっていく點は同じである。

謝靈運「初往新安桐廬口」

初めて新安の桐廬口に往く

絺綌雖淒其 絺綌 淒なりと雖も
授衣尚未至 授衣 尚ほ未だ至らず
感節良已深 節に感じて良に已に深く
懷古亦云思 古を懷ひて亦た云に思ふ
不有千里棹 千里の棹有らざれば
孰申百代意 孰か百代の意を申ばさん
遠協尚子心 遠く尚子の心に協ひ
遙得許生計 遙かに許生の計を得ん
既及冷風善 既に冷風の善きに及び
又即秋水駛 又た秋水の駛きに即く
江山共開曠 江山 共に開曠
雲日相照媚 雲日 相ひ照媚す
景夕羣物清 景夕 羣物清み
對玩咸可意 對玩 咸な意ぶ可し

しかしこの「初往新安桐廬口」では様子が異なる。これもまた永嘉郡へと向かう途上のものと思われるが、特徴的なのは「景夕 羣物清み、對玩 咸な意ぶ可し」という句である。鳥や獸がねぐらへと歸り、萬物が休息する

夕暮れの風景は、それまでは旅人の心を痛めるものであったが、この詩ではそれらは美しく、喜ばしいものだという。このような夜の風景のとらえ方は、それまでとは異なる新たなものであろう。

謝惠連「西陵遇風獻康樂」第一章

西陵にて風に遇ひ康樂に獻ず 第一章

我行指孟春

我が行 孟春を指すも

春仲尚未發

春仲にして尚ほ未だ發せず

趣途遠有期

途に趣きては遠く期有り

念離情無歇

離を念ひては情 歇くる無し

成裝候良辰

裝を成して良辰を候ち、

漾舟陶嘉月

舟を漾べて嘉月を陶しまん

瞻塗意少惊

塗を瞻ては意 惊しむこと少なく

還顧情多闕

還り顧ては情 闕くること多し

また謝惠連に「西陵遇風獻康樂」という詩がある。これは旅の途上、暴風に阻まれて留まっている状況において謝靈運に贈った詩である。この中に「舟を漾べて嘉月を陶まん」といい、春の月を見て楽しもうという姿勢が見て取れる。つまりは「旅夜」であつても樂もうという意識の表れと言えるが、結局は「塗を瞻ては意 惊しむこと少なく、還り顧ては情 闕くること多し」とあるように、旅の愁いを解消することはできなかったらしい。

鮑照「還都道中三首」其一 都に還る道中三首 其一

悅憚遂還心 踊躍貪至勤 鳴鷄戒征路 暮息落日分 急流騰飛沫 回風起江濱 孤獸啼夜侶 離鴻噪霜羣 物哀心交橫 聲切思紛紜 歎慨訴同旅 美人無相聞

悦憚して還心を遂げ 踊躍して至勤を貪る 鳴鷄 征路を戒め 暮に落日の分に息ふ 急流 飛沫を騰げ 回風 江濱に起る 孤獸 夜侶に啼き 離鴻 霜羣に噪ぐ 物哀しくして心は交横し 聲切にして思は紛紜たり 歎慨して同旅に訴へんとするも 美人 相ひ聞く無し

其二

風急訊灣浦 裝高偃檣舳 夕聽江上波 遠極千里目 寒律驚窮蹊 爽氣起喬木 隱隱日沒岫 瑟瑟風發谷 鳥還暮林誼 潮上水結湫

風急にして灣浦を訊ひ 裝高くして檣舳を偃む 夕に江上の波を聴き 遠く千里の目を極む 寒律 窮蹊に驚き 爽氣 喬木に起る 隱隱として日は岫に没し 瑟瑟として風は谷に發す 鳥還りて暮林誼しく 潮上りて水結湫る

夜分霜下淒	夜分	霜下りて淒なり
悲端出遙陸	悲端	遙陸に出づ
愁來攢人懷	愁來りて人懷に攢まり	
羈心苦獨宿	羈心	獨宿に苦しむ

晉・宋代の最後は、鮑照の詩である。

この鮑照の作は、詩題のとおり都へと還る道中の作である。まず其一の冒頭に「悅懌して還心を遂げ、踊躍して至勤を食ふ」と都へ還ることのできる喜びを述べている。しかし、夕暮れに息うときに目にした、「急流 飛沫を騰げ、回風 江濱に起こる。孤獸 夜侶に啼き、離鴻 霜羣に噪ぐ」という風景は、「物哀しくして心は交横し、聲切にして思は紛紜たり」とあるように彼を非常に愁えさせている。

其二においても旅の途上に宿泊した際の情景描寫がなされているが、冬の寒さ、日が暮れていく様子、風の音、鳥の聲など非常にもの悲しいものである。最後に「愁來りて人懷に攢まり、羈心 獨宿に苦しむ」と孤獨な夜の愁いが詠われている。

以上、晉・宋の旅の道中における夜が描かれた詩を見てきた。魏以前と同じく、やはり旅の途上で迎える夜は非常に愁いを深くするものとして詠まれることが多い。夕暮れ、あるいは夜の風景は當然もの寂しいものであるし、鳥や獸がねぐらへと歸る姿は、故郷を遠く離れた異國にある自分というものをより強く意識させるのである

う。

しかしそんな中で、陶淵明は夜の風景を美しく描き、必ずしも愁いに結びつくものとしては見ていない。また謝靈運は旅の途上で見た夕暮れの風景を「憇ぶ可し」と詠っている。これらは新たな「旅夜」のとらえ方がされ始めたことと見ることができよう。

ただしこれらの詩も、旅の道中の様子を詠うなかで、その一場面として夜が描かれるのみで、「旅夜」そのものが主題となつているとは言いがたい。

三 南齊・梁・陳代

さて續いて、南齊・梁・陳代である。ここでも旅の道中の作と思われるものを以下に挙げておく。

謝朓「之宣城郡出新林浦向版橋」「休沐重還道中」「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」

丘遲「旦發漁浦潭」

沈約「早發定山」

范雲「之零陵郡次新亭」

江淹「從征虜始安王道中」

任昉「濟浙江」

吳均「迎柳吳興道中」

何遜「與沈助教同宿湓口夜別」「還渡五洲」「道中贈桓

司馬季珪」「渡連圻二首」「南還道中送贈劉諮議別」

「春夕早泊和劉諮議落日望水」「和劉諮議守風」「入

東經諸暨縣下浙江作「宿南洲浦」

劉孝綽「夕還繁昌浦」「太子湫落日望水」「還渡浙江」

「櫟口守風」「月半夜泊鵲尾」

簡文帝「經琵琶峽」「入激浦」

庾肩吾「被使從渡江」

王筠「東陽還經嚴陵瀨贈蕭大夫」

元帝「赴荊州泊三江口」「出江陵縣還二首」

朱超「夜泊巴陵」

陰鏗「晚泊五洲」「渡青草湖」

沈炯「長安還至方山愴然自傷」

これらを見てまず興味を引くのは、「宿」「泊」「逗」などが詩題に付され、夜に宿泊した際の様子を詠うものが増えてくる点である。これについてはまた後で述べることとする。

この時代では、まず謝朓に行旅詩は多いが、旅の道中の夜が描かれるものはほとんどない。旅の道中の詩が多く、なおかつ夜の様子がしばしば描かれるのは何遜、および劉孝綽である。よってその両者の詩を少し詳しく見てみたい。

何遜「渡連圻二首」其二 連圻を渡る二首 其二

連圻連不極 連圻 連なりて極まらず

極望在雲霞 極望すれば雲霞に在り

絶壁無走獸

絶壁に走獸無く

窮岸有盤植

糾紛上巖從

穿豁下巖岼

魚遊若擁劍

猿掛似懸瓜

陰岸生駁蘚

伏水拂澄沙

客子行行倦

年光處處華

石蒲生促節

巖樹落高花

暮潮還入浦

夕鳥飛向家

寓目皆鄉思

何時見狹斜

窮岸に盤植有り

糾紛として上は巖從たり

穿豁として下は巖岼たり

魚遊びて劍を擁ぐが若く

猿掛りて瓜を懸くるに似たり

陰岸 駁蘚を生じ

伏水 澄沙を拂ふ

客子 行き行きて倦み

年光 處處に華やかなり

石蒲 促節を生じ

巖樹 高花を落す

暮潮 還つて浦に入り

夕鳥 飛びて家に向ふ

寓目 皆な郷思あり

何れの時にか狹斜を見ん

まず何遜の詩であるが、例えばこの「渡連圻二首」其二では、「暮潮還つて浦に入り、夕鳥 飛びて家に向ふ」と夕暮れに目にした風景を詠った後、「寓目皆な郷思あり、何れの時にか狹斜を見ん」といい、それらは皆故郷を思い起こさせるものであるという。

何遜「宿南洲浦」

幽棲多暇豫

從役知辛苦

南洲浦に宿す

幽棲 暇豫多く

從役 辛苦を知る

解纜及朝風 纜を解きて朝風に及び
落帆依暝浦 帆を落して暝浦に依る
違郷已信次 郷を違りて已に信次
江月初三五 江月 初めて三五
沈沈夜看流 沈沈として夜に流を看
淵淵朝聽鼓 淵淵として朝に鼓を聽く
霜洲渡旅雁 霜洲 旅雁渡り
朔颿吹宿莽 朔颿 宿莽を吹く
夜淚坐淫淫 夜淚 坐に淫淫たり
是夕偏懷土 是の夕 偏に土を懷ふ。

また同じく何遜のこの「宿南洲浦」では、旅の途上、宿泊した際に周囲の風景を見て涙を流し、故郷への思いを詠っている。

これらは皆、夕暮れや夜に目にした風景に旅の愁いを感じ、さらに故郷への思いがき立てられるという、それまでの行旅詩に描かれる夜のイメージと同じと言える。ところが劉孝綽の詩では少し様子が異なっている。

劉孝綽「太子湫落日望水」

太子湫にて落日に水を望む
川平落日迴 川平かにして落日迴かに
落照滿川漲 落照 川に滿ちて漲る
復此淪波地 復た此の淪波の地
派別引沮漳 派別れて沮漳を引く

耿耿流長脈 耿耿として長脈を流し
熠熠動微光 熠熠として微光を動かす
寒鳥逐查漾 寒鳥 查を逐ひて漾ひ
饑鶻拂浪翔 饑鶻 浪を拂ひて翔る
臨泛自多美 泛に臨めば自ら美なるもの多し
況乃還故郷 況んや乃ち故郷に還るをや
榜人夜理楫 榜人 夜に楫を理め
櫂女闇成粧 櫂女 闇かに粧を成す
欲待春江曙 春江の曙くるを待ちて
爭塗向洛陽 塗を爭ひて洛陽に向はんと欲す

例えばこの「太子湫落日望水」は、地方から故郷（都）へと還る途上の作であるが、そこには道中で目にした夕暮れ時の美しい風景が描かれ、「泛に臨めば自ら美なるもの多し、況んや乃ち故郷に還るをや」と、江邊には自ずと美しいものが多いが、故郷へ歸る途上であればなおさらであると詠う。すなわち故郷へ歸ることのできるという喜びから、その途上で目にした風景がいつそう美しく感じられると言っているのである。そして最後に「春江の曙くるを待ちて、塗を爭ひて洛陽に向はんと欲す」と、早く都へ歸りたいという積極的な気持ちで詠われている。都に還る途上という状況を考えれば、ある意味當然かも知れないが、實はこのように先を急ぎたいという思いを詠う行旅詩は、劉孝綽以前には見られない。例えば先に挙げた鮑照の「還都道中」では、最初に都へ還ることの喜

びを述べつつも、やはり最後には旅の愁いが詠われており、その違いは一目瞭然であろう。

劉孝綽「櫟口守風」

櫟口にて風を守る

春心已應豫
歸路復當歡
如何此日風
霾暄駭波瀾
倏見搖心慘
俄瞻鄉路難
賴有同舟客
移宴息層巒
華茵藉初卉
芳樽散緒寒
謫浪雖云善
江流苦未安
何由入故園
詎即紉新蘭
寄謝浮丘子
暫欲假飛鸞

春心 已に應に豫しむべし
歸路 復た當に歡ぶべし
如何ぞ此の日の風
霾暄として波瀾を駭す
倏として搖心の慘たるを見
俄かに郷路の難きを瞻る
賴ひに同舟の客有り
宴を移して層巒に息はん
華茵 初卉を藉み
芳樽 緒寒を散ず
謫浪 云に善しと雖も
江流 未だ安らがざるに苦しむ
何に由りてか故園に入らん
詎ぞ即ち新蘭を紉はん
浮丘子に寄謝し
暫く飛鸞に假らんと欲す

またこの「櫟口守風」は、旅の夜が描かれたものではないが、旅の途上、暴風にあつて足止めをされたことを詠う詩であり、そこでも冒頭に「春心 已に應に豫しむべし、歸路 復た當に歡ぶべし」と故郷へ歸ることのできる

喜びを詠っている。その中に描かれる愁いは、「江流未だ安らがざるに苦しみ」というように風に行く手を阻まれたことに對するものであり、旅そのものの愁いではない。早く故郷へ歸りたいという思いから、最後は道士浮丘公に鸞を借りて飛んでいきたいと結んでいる。このように旅の道中で喜びを詠うのは、劉孝綽の一つの特徴と言えるが、さらには詩の中に直接的な心情表現がほとんどないものもある。

劉孝綽「夕逗繁昌浦」

夕に繁昌浦に逗まる

日入江風靜
安波似未流
岸廻知舳轉
解纜覺船浮
暮煙生遠渚
夕鳥赴前洲
隔山聞戍鼓
傍浦喧棹謳
疑是辰陽宿
於此逗孤舟

日入りて江風靜かに
安波 未だ流れざるに似たり
岸廻りて舳の轉ずるを知り
纜を解きて船の浮ぶを覺ゆ
暮煙 遠渚に生じ
夕鳥 前洲に赴く
山を隔てて戍鼓を聞き
浦に傍ひて棹謳喧し
疑ふらくは是れ辰陽の宿かと
此に於て孤舟を逗む

この「夕逗繁昌浦」では、繁昌浦という地に留まったときの江邊の風景が描かれている。靜かな川の流れに水に浮かび、そこで目にした風景―夕暮れ時、遠くの渚に生じる霞、ねぐらへと向かう鳥、山の向こうから聞こえ

る太鼓の音、水邊に響く棹歌などが、視覚だけでなく聴覺も加えて立體的に表現されている。そこに詩人自身の心情は詠われない。

劉孝綽「月半夜泊鵲尾」 月半夜に鵲尾に泊す

客行三五夜 客行す 三五の夜

息棹隱中洲 棹を息め中洲に隠る

月光隨浪動 月光 浪に隨ひて動き

山影逐波流 山影 波を逐ひて流る

同じくこの「月半夜泊鵲尾」も同様、鵲尾という地に宿泊した際の江邊の夜の靜かな風景が詠われるのみである。

これら劉孝綽の行旅詩には、旅の愁いが希薄であるという特徴が見られ、特に夜に宿泊した際の様子を詠う詩に顯著である。先に述べたように、この時代の特徴として夜の宿泊を詠う詩が増えてくる點がある。それまでは、旅の道中の一場面として夜の様子が描かれることが多かったが、このような詩が作られるようになったということは、「旅夜」がいわば詩の主題として認識されるようになったと言えるのではないだろうか。そしてこのような詩は、劉孝綽以降、いくつも見られるようになる。

朱超「夜泊巴陵」 夜に巴陵に泊す

月夜三江靜 月夜 三江靜かに

雲霧四邊收 雲霧 四邊に收まる
淤泥不通挽 淤泥 挽くを通ぜず
寒浦劣容舟 寒浦 劣かに舟を容る
迴風折長草 迴風 長草を折り
輕冰斷細流 輕冰 細流を斷つ
古村空列樹 古村 空しく樹を列ね
荒成久無樓 荒成 久しく樓無し

陰鏗「晚泊五洲」

客行逢日暮 客行して日暮に逢ひ

結纜晚洲中 纜を晚洲の中に結ぶ

戍樓因嵒險 戍樓 嵒の險しきに因り

村路入江窮 村路 江の窮まるに入る

水隨雲度黑 水是雲の度るに隨ひて黒く

山帶日歸紅 山は日の歸するを帶びて紅し

遙憐一柱觀 遙かに憐れむ 一柱觀

欲輕千里風 千里の風に輕からんと欲す

陰鏗「五洲夜發」

夜江霧裏闇 夜江 霧裏に闇く

新月迴中明 新月 迴中に明かなり

溜船惟識火 溜船 惟だ火を識り

驚覺但聽聲 驚覺 但だ聲を聽くのみ

勞者時歌榜 勞者 時に榜に歌ひ

愁人數問更 愁人 數しば更を問ふ

これらの詩においては巴陵や五洲という地に宿泊した際（「五洲夜發」は出立の際）の江邊の靜かな夜や夕暮れの風景が描かれているが、やはり詩人自身の心情は直接的には詠われていない。

しかし例えば朱超の「夜泊巴陵」に見られる、「寒浦」「輕冰」など冷をイメージする語や、荒れ果てた「古村」や「荒戍」の様子などは旅の物寂しさを感ぜさせるものであろう。また陰鏗の「晚泊五洲」における雲に陰る水や夕日に染まった山の様子、あるいは「五洲夜發」の、暗がりの中の漁火、鳧の鳴き聲などの風景描寫は、讀む人に旅情を感じさせるものではないだろうか。

また劉孝綽「夕逗繁昌浦」にある「山を隔てて戍鼓を聞き、浦に傍ひて棹謳喧し」という句や、陰鏗「五洲夜發」の「驚鳧但だ聲を聴くのみ」「勞者時に傍に歌ふ」などの句は聴覺による描寫、先に述べた朱超「夜泊巴陵詩」の「寒浦」「輕冰」など冷を感じさせるものは觸覺による表現であり、視覺のみならず聴覺や觸覺などによって立體的、多角的に夜の風景を描いているのは一つの特徴と言えよう。旅の途上の風景は目新しいものであるが、夜という状況は、周邊の風景を視覺で捕らえるには難しいものがある。それもあって、聴覺や觸覺などによる描寫も含んだ多角的な表現となつたのではないだろうか。無論、これら聴覺や觸覺による描寫がそれ以前にもないわけではないが、直接的な心情表現がない分、それを讀

む人に一層旅情を感じさせる効果があるのではないだろうか。

おわりに

以上、六朝の行旅詩について、旅夜という状況を中心に考察してきた。そもそも夕暮れ、夜とは鳥や獸がねぐらへと歸り憩う時間であり、そのような時に異國にあるということ、旅夜という状況は旅人の憂いを深くするようである。よって古くから行旅詩においても旅の夜の風景は憂いを抱かせるものとして描かれていた。しかし晉の陶淵明や宋の謝靈運の詩においては、必ずしも愁いに結びつくものとしての夜の風景ではなく、とりわけ謝靈運は夕暮れの美しい風景を「意ぶ可し」と詠っており、新たな旅夜の見方と言えよう。ただしそれは少數であり、この時代はまだ旅夜は旅の愁いを一層かき立てるものとして詠われることが多い。

そして梁代にいたり、夜に宿泊した際の様子を詠った詩がしばしば作られるようになる。これは旅夜というものが詩の一つの主題として認識されてきたことを示すものであろう。その中で徐々に旅の愁いが直接的に詠われないものが増えてくる。そもそもこの時代の特徴として詩に心情が詠われることが少なくなるという點があるが、それらが旅夜の詩にも影響しているものと思われる。それは特に劉孝綽の詩あたりから顯著になつてくる。この頃の旅夜の詩には、宿泊した際に眼にした江邊の靜かな

風景が描かれることが多く、詩人自身の情は詠われなくともその詩を読む人はその風景に旅情を感じるのである。

さらに一つ特徴として言えるのは、視覚のみならず聴覚や觸覚などによつて多角的に夜の風景を描いている点である。やはり夜という視覚的に限界がある状況であるからこそであるが、こういった特徴は唐代の旅夜の詩である張繼の「楓橋夜泊」などにも通じるものと言える。

唐・張繼「楓橋夜泊」

月落烏啼霜滿天

月落ち烏啼きて 霜天に滿つ

江楓漁火對愁眠

江楓 漁火 愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺

姑蘇城外の寒山寺

夜半鐘聲到客船

夜半の鐘聲 客船に到る

この張繼の詩もまた、詩人自身の心情が直接的に詠われるものではないが、「烏啼」「霜滿天」「鐘聲」など、視覚だけでなく聴覚や觸覚により、夜の風景を多角的に表現している。そしてそこから讀む人に旅情を感じさせるものであり、このような詩の原點はすでに梁代の行旅詩にあつたと見ることができよう。

なお今回は夕暮れと夜とを合わせて旅夜として考えたが、やはりこれは本來區別すべきものであり、今後はこのような點を改めて考察していきたい。

筆者はこれまで「旅立ち」および「旅夜」という状況から六朝の行旅詩を考察してきた。今後は目的地(都、

赴任先等)における作、あるいは同じ旅の途上の作でも朝や昼間の様子を詠うものなど、その他の旅の状況においても詳しく検討を加え、六朝の行旅詩の歴史的變遷と唐詩への影響について明らかにしていきたい。

注

(1) 拙稿「六朝の行旅詩―旅立ちの詩について」(『中國中世文學研究』第五十七号 二〇一〇)

(2) この詩は古注と新注で解釋が異なり、孔穎達疏では「思君子僚友在外之危難」(君子僚友の外の危難に在るを思ふ)といい、朱熹集伝では「大夫久役于外、其室家思而賦之」(大夫久しく外に役し、其の室家思ひて之を賦す)という。ひとまず後者に從つておく。

(3) 例えば李陵錄別詩八首・其二(『古詩紀』卷十)に、以下のような詩がある。これは旅に出た者が夜に故郷や親しい人を思い、憂いに沈むものである。

燦燦三星列

燦燦として三星列なり

拳拳月初生

拳拳として月初めて生ず

寒涼應節至

寒涼 節に應じて至り

蟋蟀夜悲鳴

蟋蟀 夜に悲鳴す

晨風動喬木

晨風 喬木を動かし

枝葉日夜零

枝葉 日夜零つ

遊子暮思歸

遊子 暮に歸らんことを思ひ

塞耳不能聽

耳を塞ぎて聽く能はず

遠望正蕭條

百里無人聲

豺狼鳴後園

虎豹步前庭

遠處天一隅

苦困獨零丁

親人隨風散

歷歷如流星

三萍離不結

思心獨屏營

願得萱草枝

以解饑渴情

遠望すれば正に蕭條たり

百里 人聲無し

豺狼 後園に鳴き

虎豹 前庭を歩む

遠く天の一隅に處り

苦りに獨り零丁たるに困しむ

親人 風に隨ひて散じ

歷歷として流星の如し

三萍 離れて結ばず

思心 獨り屏營す

願はくは萱草の枝を得て

以て饑渴の情を解かん

(4) 例えば魏武帝「苦寒行」は樂府ではあるが、出征していく様子、苦難が描かれており、王粲「從軍詩」もまた同様である。これら出征、從軍の詩もやはり行旅詩の一つと言える。そしてその王粲「從軍詩」にもやはり夕暮れに心痛める様子は詠われる。

(5) なお旅夜に限ったものではないが、魏文帝には「黎陽作三首」「於譙作」「於玄武陂作」「至廣陵於馬上作」「於明津作」など、詩題に具体的な地名が付けられるものが多い。これらは同時代では魏文帝にのみ見られる特徴であり、行旅詩を考察する上で留意すべきであろう。

(6) 一海知義注『陶淵明』（中国詩人選集四 岩波書店 一九五八）、松枝茂夫・和田武司譯注『陶淵明全集』（上）（岩波文庫 一九九〇）ではともに、故郷から江陵に歸任しようとし

て塗口を通った時の作とする。花房英樹『文選（詩騷篇）』三（全釋漢文大系二八 集英社 一九七四）では「辛丑の歳の七月、假に赴きて還らんとし、江陵より、夜、塗口に行く」と読み、「秋の初め、休暇を得て故郷に歸ろうとし、夜に塗口を過ぎたときに作った詩。ただし、休暇を終えて、江陵に歸るときの作と見る説もある」と述べる。

(7) 例えば謝朓が荊州から都へと還ってきた後、荊州の同僚に贈った「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」では、都へ還る道中の様子は詠われているが、さらに都について後の様子も描かれている。「秋河曙に耿耿たり、寒渚 夜に蒼蒼たり」と夜の描寫もあるが、後に續く句を見るにおそらく都での夜であろう。